

東国大学校仏教大学（韓国）と 東洋大学国際哲学研究センター（日本）の 共同研究報告（第2回から第4回）

佐藤 厚

本稿は東国大学校仏教大学（韓国）と東洋大学国際哲学研究センター（日本）との共同研究の第2回から第4回までの共同研究の報告である。これは2014年5月に締結された共同研究協定に基づくものであり、そのテーマは「近代における日韓両国仏教の変遷」である。

・第2回研究会

2015年3月19日、東洋大学白山キャンパス8号館7階125記念ホールにて、第2回研究会が開催された。司会は岩井昌悟氏（IRCP 研究員 / 東洋大学）が務め、鄭祥教氏（東京大学大学院）が通訳を担当した。開会式では、竹村牧男氏（IRCP 研究員 / 東洋大学学長）と姜文善（慧源スニム）氏（東国大学校教授）が開会の挨拶を述べた。

続いて研究発表が行われた。最初の発表は、佐藤厚（IRCP 客員研究員 / 専修大学特任教授）の「1917年、朝鮮仏教界首脳の日韓視察—日本側の対応を中心として—」である。これは日本の植民地時代における韓国仏教界への日本側の認識を論じたものである。次いで高榮燮氏（東国大学校教授）の「万海（韓龍雲）の日本認識—仏教界における愛国啓蒙運動の思想的端緒—」と題された発表が行われ、植民地時代に活躍した韓龍雲の愛国啓蒙運動の思想的バックグラウンドが明らかにされた。

昼食をはさみ、三浦節夫氏（IRCP 研究員 / 東洋大学教授）「日本近代における伝統の「発見」—井上円了の『仏教活論序論』」、金浩星氏（東国大学校教授）「柳宗悦の解釈学における眼目—『南無阿弥陀仏』を中心として—」、竹村牧男氏「西田幾多郎の禅思想—「逆対応」の論理を中心に」、姜文善（慧源スニム）氏「近代期の韓国比丘尼の修禪と悟りに対する一考察」という四つの発表が行われた。これらの発表では、近代仏教に井上円了が果たした役割（三浦氏）、柳宗悦による法然・親鸞・一遍の創造的な解釈（金氏）、西田幾多郎の「逆対応」と「平常底」に基づく禅理解（竹村氏）、近代韓国の女性僧侶の禅修行と悟りの内実（姜氏）が論じられた。その後、全発表者による総合討論が行われ、活発な議論が展開された。

最後に村上勝三氏（IRCP 研究員およびセンター長）が閉会の挨拶を行い、研究会は終了した。日本側、韓国側、双方が東アジアという広い枠組みに立ち、新たな知見を生み出そうとしたことがこの研究会の大きな成果であった。

・第3回研究会

2015年7月11日、東洋大学白山キャンパス8号館7階125記念ホールにて、第3回研究会が開催された。

本研究会の司会は岩井昌悟氏（IRCP 研究員 / 東洋大学）が務め、鄭祥教氏（東京大学大学院）が通訳を担当した。竹村牧男氏（IRCP 研究員 / 東洋大学学長）と姜文善（慧源スニム）氏（東国大学校教授）が開会の挨拶を述べた。

べた後、6名の発表者による研究発表が行われた。

最初の研究発表は佐藤厚（IRCP 客員研究員 / 専修大学特任教授）による「朝鮮仏教界の海外情報の摂取—1910年代を中心として—」であった。1912年から13年にかけて刊行された『朝鮮仏教月報』に収録された5つの翻訳文献の検討を通じて、近代朝鮮仏教界が中国や日本の文献をいかに摂取したのか、何を得ようとしていたのかを論じたものである。

次いで、金光植氏（東国大学校教授）の「韓国近代仏教「帯妻肉食」の二元的路線—日本仏教受容に対する賛否の事例」と題された発表が行われた。これは日本植民地時代に広がった僧侶の肉食妻帯の問題に対して、朝鮮仏教界の反応を賛否の両面から論じたものである。

昼食休憩の後に行われた研究発表は、三浦節夫氏（IRCP 研究員 / 東洋大学教授）による「井上円了の妖怪学」である。これは井上円了の生涯と共に、妖怪学の内容とその意義を紹介したものである。次いで金浩星氏（東国大学校教授）の発表「倉田百三の親鸞理解—『法然と親鸞の信仰（下）』を中心として—」が行われた。これは倉田百三の親鸞理解について論じたものであり、その特徴と問題点を明らかにした。

短い休憩を挟み、竹村牧男氏の「鈴木大拙と西田幾多郎」と題された発表が行われた。それは西田幾多郎と鈴木大拙の宗教哲学を概観し、その意義を明らかにしたものである。最後の発表は、姜文善（慧源スニム）氏による「近代韓国禪院の芳脚録に現れた修行文化」であった。これは芳脚録という近代韓国禪院に残された記録から、当時の修行文化のありかたを論じたものである。

研究発表の後、総合討論が行われたが、予定時間を超過するほど熱のこもった討論となった。最後に村上勝三氏（IRCP 研究員およびセンター長）による閉会挨拶により研究会の幕は閉じた。韓日の研究者が、それぞれ異なった視点を提供しながら、新たな知見を目指したことがこの研究会の成果である。

・第4回研究会

2015年11月19日、東国大学校・茶香館セミナー室にて、第4回研究会が開催された。

研究会の司会は金浩星氏（東国大学校教授）らが務め、朴基烈氏（東国大学校講師）らが通訳を担当した。開会式では宗浩スニム（仏教大学院・仏教大学長）の開会の挨拶が行われ、続いて竹村牧男氏（IRCP 研究員 / 東洋大学学長）、韓普光氏（東国大学校総長）による祝辞が述べられた。続いて6名の発表者による研究発表が行われた。最初の発表は、竹村牧男氏の「近代日本仏教における戒律復興運動の2、3の動向について」である。これは日本仏教における戒律をめぐる歴史、戒律復興運動を概観した後、近代における戒律復興運動の例として、釈雲照律師、釈定光をとりあげ、その歴史的意味を明らかにしたものである。

続いての発表は朴仁成氏（東国大学校教授）による「遍行心所觸に対する深浦正文の解釈」である。これは大乘仏教の唯識思想、法相宗の中心典籍である『成唯識論』の中、遍行心所觸という言葉の解釈をとりあげ、日本の近現代の仏教学者である深浦正文が『唯識論解説』などにおいて原文を誤読したまま解説を行っていることを指摘し、原典に基づく正しい解釈を提示した。

昼食をはさんで午後の発表が行われた。第一部の発表は二人である。最初は三浦節夫氏（IRCP 研究員 / 東洋大学教授）の「井上円了と清沢満之—近代日本の仏教者」である。これは近代仏教の重要人物である井上円了と清沢満之とをとりあげ、両者の活動を概観した後、近代仏教史における両者の共通点を四点指摘した。続いて姜文善（慧源スニム）氏（東国大学校教授）の「1920~1940年代、日本の朝鮮仏教復興運動とその様相—中村健太郎『朝鮮生活50年』を中心として—」である。これは植民地時代に朝鮮半島で活動した中村健太郎、阿部充家、小林源六をとりあげ、彼らが当時、朝鮮半島の仏教をどのように復興させようとしたかを明らかにしたものである。

休憩を挟み、午後の第二部の発表が行われた。最初は佐藤厚（IRCP 客員研究員 / 専修大学特任教授）による「『朝鮮仏教総書』刊行計画—1920年代朝鮮における幻のプロジェクト」である。これは、1920年代、日本の植民地下の朝鮮において朝鮮撰述文献だけを収録した『朝鮮仏教総書』の刊行計画があった。この背景には、当時日本で刊行された卍続蔵経の中に朝鮮半島では失われた仏書が多数収録されていたこと、日本で日本撰述文献だけを集めた大日本仏教全書が刊行されたことがある。結果としては実現しなかったが、この計画の経緯について、中心人

物である李能和、鄭昞震の活動を中心に論じたものである。

続いて高榮燮氏（東国大学校教授）による「雷虚金東華の仏教認識—宇井伯寿と関連して」である。金東華（号は雷虚）は植民地時代に日本の立正大学に留学した僧侶で、第二次大戦後には韓国の仏教学会の中心になるとともに東国大学校の総長を務めた人物である。先行研究では、金東華の主著『仏教学概論』（1954年刊行）が、日本の現代の代表的な仏教学者である宇井伯寿の『仏教汎論』（1947、48年刊行）の影響を大きく受けたものであるとの評価がなされていたが、それに対して高榮燮氏は、影響はごくわずかなものであり、大部分は金東華の独創によるものであることを論じた。

個人発表の後、総合討論が行われた。司会は朴京俊氏（東国大学校教授）であった。そこでは司会者による各発表者への質問、会場からの質問、発表者相互の質疑応答が活発に行われた。最後に閉会式が行われた。閉会の辞を述べた宗浩スニム（仏教大学院・仏教大学長）は、今回の研究会を振り返るとともに、2年間の共同研究が今回で終わることを惜しみ、その再開を期するとの言葉で締めくくった。

・おわりに

2014年11月から4回にわたって行われた共同研究会は、当初の申し合わせ通り、東国大学校で2回、東洋大学で2回開催された。その中では合計24本の発表が行われた。内容を大きく分類すると、日本の近代仏教、韓国の近代仏教、近代における日本と韓国の交流になる。これらは、いずれも「日本と韓国の近代仏教の変遷」という大会の主題を考えるに際し重要な問題を提起するものであり、今後、この分野を研究していく上での指標になると考えられる。さらに研究会を通して培った両大学間の交流は、必ずや将来の両大学の実りある交流につながるものであることを確信する。